

「まちやひとに寄り添った映像を」

映

像ジャーナリストの熊谷博子氏。

戦争、原爆、麻薬をテーマに世界各地を回り、多くのドキュメンタリー番組を制作しました。

38歳で結婚、40歳で出産。

これを契機に仕事や作品に対する意識は大きく変化したようです。

それ以来、「まち」や「ひと」に寄り添った

ドキュメンタリー映画を製作し、

幅広い世代から共感を得ています。

モットーは「右手にカメラ 左手に子ども」。

熊谷 博子

映画監督・映像ジャーナリスト



プロフィール

1951年生まれ。映画監督・映像ジャーナリスト。大学卒業後、日本映像記録センターのディレクターとして日本テレビ系列の『知られざる世界』などのドキュメンタリーを手掛ける。国境を越えて戦争や核、麻薬などシビアな社会問題に鋭く切り込む手腕が高く評価され、フリーとして独立。結婚・出産を経た後も「右手にカメラ、左手に子ども」をモットーにドキュメンタリー映画を制作する。

ドキュメンタリーを撮り続けて

熊谷博子さんのドキュメンタリー映画『三池 終わらない炭鉱の物語』^{※1}が各地で上映され、好評を博しています。

三池炭鉱と深くかかわってきた「まち」の歴史をテーマに大牟田市と7年の歳月をかけて完成させた作品です。行政が記録映画を作ることはもちろん、「まち」の負の遺産に正面から向き合ったのも異例のことです。

熊谷さんは日本映像記録センター（制作会社）でディレクターとして、戦争、原爆、麻薬等をテーマに海外の危険な地域での取材に飛び回り、NHKを含めて約50本を越すドキュメンタリー番組を制作されました。

一方で、ここ数年間は阪神・淡路大震災後の神戸・長田の人々や、向島のまちづくりを目を向けるなど、「ひと」や「まち」に寄り添った視点から、ドキュメンタリー映画を撮り続けています。『三池』はその代表作です。

時間を経るにつれて追い求めるテーマが変化してきたことと背景には、熊谷さん自らの結婚・出産を境にした心境の変化があったようです。仕事一辺倒の生活から、閉ざされたマンションの一室で育児に勤しむ毎日となりました。仕事と育児の両立が迫られる中で、必然的に視点は身の回りの環境に目を向けることになったと述べています。現在に至るまで「右手にカメラ、左手に子ども」をモットーに番組や映画作りに奔走されています。

・「まち」や「地域」に向き合う視点とは。

・ドキュメンタリーでのテレビと映画の違いとは。

・仕事と育児をどう両立させていくのか。

これらを中心にドキュメンタリーのあり方やワークライフバランスの観点から、熊谷さんにお聞きしました。

ドキュメンタリーは「映像的運動神経」が大切

——10年間、日本映像記録センターで活躍されていました。駆け出しの頃はどのようなことを学びましたか。

日本映像記録センターはテレビ・ドキュメンタリー専門の制作会社でした。まだできて3年目だったので、皆やるぞーという熱気があり、テレビの世界に新風を吹き込むんだという気構えがありました。だから徹夜は当たり前前で、今考えればとんでもない働き方をしていました。

会社の代表の牛山純一さん^{※2}の『南ベトナム海兵大隊戦記』^{※3}を見たときは衝撃的でした。命乞いする農民を撃ち殺す少年兵。だけど彼は小鳥をかわいがる優しさも持っている。そんな戦争の現実を見事に表現していて、私もこんなドキュメンタリーを作りたいと思いました。

そんな牛山さんから教わったことはたくさんあります。なかでも印象的だったことは、彼は企画書を信用しないということでした。確かに番組の狙いは大切ですけど、企画書どおりに進んでしまったり、現場で何も発見していないということになってしまいます。現場に出ると、想像していたことと違うケースに遭遇することはよくあることですよね。だからこの事実をもっと深く追いたい、このシーンを増やそう、この進行は無理があるとか、現場の判断が何よりも大切になってきます。

NHKはとくにそうかもしれませんが、今のテレビは企画書ありきになって、企画書通りに作らないと許されない雰囲気があるのではないのでしょうか。プロデューサーが、現場での新しい発見を歓迎するなど現場が主体的に取り組める柔軟な仕組みが必要だと感じています。

——日本映像記録センターで様々なことを学びながら、数多くのドキュメンタリー番組を制作されました。どのような姿勢で臨むよう心掛けたのですか。

牛山さんの求心力もあり、会社には色々な人が出入りしていました。劇映画の監督として有名な大島渚さん^{※4}や水俣を撮り続けるドキュメンタリー作家の土本典昭さん^{※5}です。小さい会社だったので、アシスタントをしながら直接話を聞くことができ、多くのことを吸収できました。

とくに土本さんからは「撮るということは相手を好きになる行為と同じで、好きになったら人を抱きしめたくなるだろう。だけど直接に人を抱きしめるのではなく、カメラで抱きしめることが撮ることなんだよ」と教えられました。

その感覚はものすごくよくわかります。

私は「映像的運動神経」と呼んでいますけど、こちらが相手を動かそうとするのではなく、相手の動きにこちらがその都度どう反応できるか、相手をどうやって発見していくかがドキュメンタリーを撮っていて面白いんです。一方的に撮るのではなく、相手と心でキャッチボールする感覚が大切です。私は「つくりたい」という前提があつてつくるやり方ではなく、「伝えたい」という意識が先にあつて番組制作に臨むようにしています。

日本映像記録センターではディレクターとして様々なドキュメンタリーを制作しました。バンコクのスラム街に住む13歳のヒロイン中毒患者を追った『追跡 麻薬のルーツ』^{※6}や、



※1「三池 終わらない炭鉱の物語」

1997年に閉山した三池炭鉱をテーマにしたドキュメンタリー映画。四人労働、強制連行、三池争議、炭じん爆発事故といった負の遺産を抱えながら、炭鉱で生きた男と女たちの証言を聞き7年がかりで完成。東京ではミニシアターでの上映ながら1館で来場者1万人を超える異例の話題作。

※2「牛山純一」

1953年早稲田大学卒業後、日本テレビ入社。ドキュメンタリー番組「知られざる世界」の制作を手がける。1972年に独立し、日本映像記録センター（制作会社）を設立。1997年没。

※3「南ベトナム海兵大隊戦記」
P251参照

※4「大島渚」

映画監督。松竹に入社後、監督として『青春残酷物語』『太陽の墓場』のヒット作を手がける。日米安保の改定に反対する安保闘争を舞台にした『日本の夜と霧』の上映中止に抗議し、退社。テレビのドキュメンタリーも多数制作したほかセンターリーダーとして活躍。

ペールの奥に隠されたイスラム女性を描いた『モロッコ女だけの都』^{※7}は番組の評判も視聴率もよかったです。このことでドキュメンタリーに魅力を感じ、この仕事を一生続けていくはずと思いました。

——退社してフリーの映像ジャーナリストになろうとしたきっかけは何ですか。組織の限界を感じたのですか。

実は仕事を始めたとき10年は突っ走ろうと思っていました。その間にテレビをめぐる状況も変わり、いい番組制作会社もたくさんできました。私がやってきたのは、あるひとつのつくり方です。フリーになつたらもつと違う場所でもつといろいろな番組を、いろいろなやり方で、さまざまな人と作っていきけるのではないかと。

それと、ドキュメンタリーを作ってきたなかで、どうしても画面からこぼれ落ちるものがたくさんありました。私のディレクター能力がないからだ、と言われるかもしれませんが、せんけど、交渉中に思わぬことに出くわすこともあるし、実は昔はこうだったと、あつと驚くようなスクープを発見することもありました。テレビは目の前で動いている事実を切り取るのに適しています。ただフリーになればテレビで表現できなかったものも、活字など他の媒体では表現できるのではないかと思いました。

もともと小さな制作会社にいたので、実際にフリーになつてもそんなに変わりませんでした。NHKや大新聞と違って名刺の力は通用しなかったので、相手に対しては、私は誰で、こういう作品を作ってきましたとゼロから説明しなければなりません。でもその中から人間関係を作つて、自分の力をどう発揮していくのかを学びました。とくにNHKは組織の力があまりにも大きいので甘えてしまうこと

もあると思います。だから個としてどう戦うのか、どう作っていくのかを意識していく必要があります。それが権威や政治家の圧力から持ちこたえ、番組の自主性を保つていくことにつながるのではないのでしょうか。

育児ノイローゼをきっかけに

——テーマが戦争、原爆、麻薬から「ひと」「まち」「地域」に変わっていききました。育児を経験したことが大きかったと聞いています。

出産後は子どもとともに閉ざされたマンションの一室で暮らすようになります。それまで仕事で飛び回ってばかりでしたので近所に頼る人もいません。外とつながらない世界に突入ってしまったうえに、泣き続ける子どもがいて、自分がミルクをあげないと死んでしまうという、一人の人間の命の生殺与奪を握っているというか、プレッシャーがすごくありました。一日中縛り付けられている状態になるわけですよ。赤ん坊を外に投げたい衝動に駆られるなど、育児ノイローゼになりました。東京のような大都会で子育てをするのはこういう孤独なことなんだと深く考えさせられました。

数か月経って保育園に預けられるようになってからは全然違う世界が見えてきました。保母さんに助けられ、同じ立場のお父さん、お母さんに出会うなかですごく救われた気分になりました。そこで生まれて初めて「地域」という言葉を意識しました。そうすると自分の住んでいる場所とか、本当に身の回りのことに目を向けなければならぬと気付いたんです。

それまでは世界で一番危険な前線から情報を発信しているんだという自負があつて、家や子どものことなんて誰かほかの人がやればいいと。「女・子ども」の世界をバカにし

※5 「土本典昭」

記録映画作家。1956年若波映画製作所に入るが、一年でフリーに。全共闘運動や水俣病に関する多くの作品を発表し、一貫して弱者の立場から発信を続ける。『ドキュメント 路上』『バルチザン前史』『水俣・患者さんとその世界』など。2008年死去。

※6 「追跡麻薬のルーツ」日本テレビ『知られざる世界』で放送されたドキュメンタリー。タイのバンコクの麻薬売上の温床になっていたイスラム街を取材。13歳のヘロイン中毒者を中心にセンセーショナルに描いた。

※7 「モロッコ 女だけの都」

ペールの奥に隠されたイスラム女性の社会を描いたドキュメンタリー。イスラム女性の習慣を知り、理解しようと体当たりで取材し、謎に包まれていたイスラム女性の一家多妻についてどう考えるか、家の中で何をしているのかなどの撮影に成功した。

ていました。これは一昔前の男たち、あるいは今もある価値観とまるで同じものだったと思います。いかに私自身が間違っていたかを痛感しました。

このように子どもを産んでノイローゼになった拳句、保育園のみんなに助けられたことが「まち」や「地域」「ひと」に関心を持ったきっかけでした。

——NHKは採用に占める女性の割合が4割に達していません。子育てと仕事をどう両立すればいいでしょうか。

私はフリーだからね（笑）。でも番組制作はチームワークなので、私は子どもがいてこういう状況で仕事をしていまずと周りのメンバーにはつきりと伝えておくことが大切だと思います。民放労連の女性部会でもどう両立を図るのかというテーマで話し合ったことがあります。上司をいかに変えていくかということもあると思います。

あとは体験も重要ですよ。共働きで子育てをした経験のあるスタッフがいると、ものすごく理解を得られやすいと思います。私も経験してからは変わりました。

一方で、子どもの気持ちも考えないといけませんよね。保育園で親が迎えに来るのを首を長くして待っているわけですから。だから私は、「忙しく申し訳なかったけど、お母さんはこれを作ったのよ」と子どもにも作品を見せるようにしていました。そして撮影現場にも連れていきました。最中は無理ですが、事前に見せたり、事後に教えたりするケアは作品ごとにやっていました。

あとは私自身の反省にもなりますけど、子育て中はものづくりに向けて十分な準備のできないことが多いんです。以前は勉強する時間はすごくあったわけで、その知識を背景に、スタッフにこういう理由だから撮りたいと理論的な

説得ができたんですね。だけど「とにかく撮りたいのよ」みたいな熱意とやる気だけでは感覚的で乱暴な説得の仕方になってしまっただけですよ（笑）。

戦争が起きているから撮ろうというのはみんな理解してくれませんが、「まち」や「地域」で起こった小さな事柄は「とにかく撮りたいのよ」だけでは簡単には理解されません。時間がないなかでも、小さなことを地道にコツコツと説明していくことが大切だと思います。

テレビと映画の違い

——テレビと映画を比べて最近では映画がメインとなっています。テレビと映画の違いをどのように捉えていますか。



子育てと仕事の両立の大変さを感じている時に、路地の中で近所付き合いが残っている向島を舞台にしたドキュメンタリー映画『ふれあうまち』※8を作りしました。これはテレビにならないと感じますよ。せいぜい首都圏ニュース、せいぜい5分の企画です。日常の細々としたまち同士の草の根交流を描いた程度のものであります。

確かにテレビはマス相手なので反応はあるのですが、問い合わせレベルで終わってしまうことがかなり多いです。それに対して映画は時間枠やCMもないので編集は自由にできますし、私はこう思うというパーソナルな語りかけができることに魅力を感じます。そして何よりも映画は観た人がどう揺り動かされているかを直接感じることができる

※8 「ふれあうまち」
東京・向島とドイツ・ハ
ンブルグのオッセンデン
を舞台に人々が自分の住
むまちをどう愛し、住民
の手で古いものを活かし
たまちづくりをし、いかに
暖かいコミュニティを作
っていくかを描いた映
画。

んです。映画館や会場という同じ空間を共有でき、反応がすぐ表れます。どの場所で見せているかによって作品が変わってきます。映画はまさに生き物だと思います。

テレビを長くやってきて、確かに多くの人に知ってほしいという葛藤はありますが、これで世の中変わったかというと変わっていないのかなとも感じています。映画は鑑賞した人が確実に変わっていくことが手にとるようにわかります。そして、映画を観ていいと思ってくれた人が、その場で討論を始めたり、上映会を開いてくれたり、次のアクションをすぐに起こしてくれるんです。こういう動きが世の中を変えることにつながるのだと思います。

——番組は作った時点では「半成品」、視聴者の手に渡った時点で「完成品」ともいわれます。テレビは完成品の姿を見届けることが難しいということですね。

テレビはデジタルのものなんですよね。ずい分前に、TBS系列の『サンデーモーニング』の準コメントーターとか、フジテレビ系もやりましたが、その時に「いいコメントだったね」という人は少ないんです。むしろ、「かわいかった」「服装がきれいだったね」とデジタルからくる印象が絶対的に先行します。私のしゃべりが悪かったせいもあると思うけれど、私はジャーナリストという肩書なので自分が関わっていないことはしゃべらないという主義にしています。しかしタレントも多く出演していると、無責任に口から出てしまった言葉が流れを決めたり、笑いを誘ってしまうことがあります。

ムードで世の中が思わぬ方向に動いてしまい、視聴者がどう感じているかを直接見ることはできないのは非常に恐ろしいことだなと感じました。番組制作者自身がどう視聴

者の声を聞いていくか課題だと思います。

一方で、映画は上映会を通じてどのような年齢の人が集まっているか、どのような感情や気持ちを抱いているか、ダイレクトに伝わってきます。その意味では、映画は「完成品」となった姿をみることもできると思います。

「まち」や「ひと」に寄り添う映像

——「まち」や「ひと」を撮っていく際にどのようなことを意識されていますか。

1988年、旧ソ連軍撤退時にドキュメンタリー映画を作るために半年近くをアフガニスタンで過ごしました。ある日ホテルがドスンと揺れたので外に出てみると、近くのバザールが炎上し、あたりは血の海で多くの死者が出ていました。ホテルに戻ると靴の裏に血がべつとりとついていました。そんな光景が生活の中になりました。

翌年はパキスタン側から難民キャンプ取材しました。その時は直接の戦争被害というよりは、母親の腕に抱かれながら栄養失調で痩せこけて、もう死ぬのがわかっていいる赤ん坊がいました。その様子を私は撮っていました。私が医者や看護婦だったら目の前の赤ん坊を救えるかもしれないと思うこともありました。なぜ撮るのだろうと自問自答しながらも私は撮り続けていたのです。

その後、阪神・淡路大震災で被災した長田の人々から、生きていたのに助けることができなかつたという、アフガニスタンで聞いたことと同じような話をきいたわけです。私のなかでアフガニスタンの戦争と震災がひとつにつながりました。私は相手には成り代われないが、そういう人々に寄り添うことはできるんじゃないか、寄り添える映像ができたらいなと思いました。カメラで触れ、人々に寄り

添っている感じを持ち続けたいのです。

——NHKの地域放送にはどのようなことが大切ですか。

映画『三池 終わらない炭鉱の物語』では、三池炭鉱のある大牟田市の協力があつたからこそできました。1997年の三池閉山後、大牟田市はこれからどうやって生きていくかを模索していました。

私は「まち」と「ひと」がどう関わって生きていくかを考える映画を作っていた関係から、シンポジウムと呼ばれ、「三池炭鉱を映像として遺すべきだ」と発言しました。すると参加者からは「負の遺産は早く忘れるべきだ」という声がありました。地元では炭鉱を囚人労働、強制連行、争議、事故と負の遺産と捉えている人が多かったのです。しかし、負の遺産として炭鉱の歴史を消し去ることは、必死に生きて戦った人々を消し去ることになります。

歴史を与えられたイメージや価値観で見つめるのではなく、自分で一つ一つ掘り返しながら見つめ直していくと、そこには宝の山が眠っているものです。三池との関係でも、私たちはこれまで宝物の掘り出し方がわからなかったし、その意味で過去と向き合つてこなかったということではないでしょうか。負の部分を隠し続ける限り、未来はないと思います。とにかく事実を表に出していくことです。

NHKはとくに全国各地で地域放送をおこなっているわけですから、なおさ



らその歴史を見つめ直していく視点が重要だと思っています。広島、長崎や沖縄のように問題のある地域とそうではない地域は確かにありますけど、地域をコツコツと歩くことで発見があります。

そして、「まち」や「ひと」を撮る時には、当事者に成り代わることはできないが、映像で寄り添っていくという姿勢を示していくことで視聴者の支持が得られるのではないかと思います。

インタビューを終えて

なぜ撮るのか。「その人にはなり代われないけれど寄り添うことはできる。ならば相手に寄り添う映像を撮り続けたい」という熊谷さんの言葉が印象的でした。

戦争や震災を報じるテレビを通じて、私たちが問われたのは平和や防災のことだけでなく、いかに他人の痛みを共有できるか、それに尽きるのではないのでしょうか。

痛みを感じない、または伝えないマスコミとは一線を画したい、そんな公共放送をめざすべきだと感じました。

報告 中央放送部長 小磯亮